

# 追悼 今江正知先生

龍膽のリンドウの花は青空の一葉<sup>一葉</sup>と言った詩人があるというが、このハルリンドウは、青空からポタリポタリと落ちてきた夏、青な葉が草原をパツパツと踏む一葉の花になっ  
たように見え、一面に一面に散らばる型の草地に一面に一面に咲き乱れて  
いることからも、花は光に当ると閉じる性質がある。  
知名は春<sup>春</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>る。龍<sup>龍</sup>の<sup>の</sup>花<sup>花</sup>種<sup>種</sup>である。



# ありがとう 今江先輩

平山 謙二郎

今江さんの年賀状はいつも決まって植物の写生図だった。それに「寿」の一字。昨年は「勤馬宣=タカトウダイ」の図。今年は何だっけと一瞬思っただけでハッとした。彼はもう亡くなったんだ。そう思うと、改めて寂寥感がじわっと押し寄せた。

教養部教官時代、今江さんは学生達に必ずこの植物写生図を書かせていた。「顕微鏡屋ばかり増えて、フィールドをやる人が少なくなってしまった。植物をきちんと観察し、写生図を書くことはモノの本質を見定める目を養うことにつながる」というのが持論で、一部の学生の反撥などもともしなかった。彼の賀状の写生図を全部保存しておけば、いい植物図録集が出来たのにと悔やまれてならない。

今江さんは私にとって兄貴分のような存在だった。師であり、高校・大学を通じての先輩であり、色んな分野での仕事仲間（同志）だったと思う。どこでどう出会ったのか。多分学園紛争の頃、私は教育担当記者をしていたので、熊大をはじめ色んな大学の研究室めぐりをしていた頃だったろう。今江さんの研究室を訪ねると、そこは本や資料のヤマ。まさに足の踏み場もない。モウモウたる紫煙のなかで、よくコーヒーをご馳走になったものだ。（資料類の貯め込み癖と整理苦手は多分終生続いたのではないが）

以来、今江さんとは色んな学術調査や勉強会、あるいは楽しい遊びなど幅広く付き合ってもらった。北向山調査（昭和37年）や阿蘇外輪山一周調査（同39年）をはじめ、600回余り続いた「くまもと博物誌」の熊日連載（同47年～51年）など、いつも中心的な存在としてサポートしていただいた。植物分類学者としての豊富な野外研究の研究実績、上妻博之先生仕込みの博覧強記ぶりには、いつもおどろかされた。文系の人間の私に大勢の理系人脈を作っていただいたのもありがたかった。

このほか五家荘の会、里山研究会（のちに熊本自然環境研究連合会）をはじめ、五木村再生アドバイザー、五高記念館友の会、熊本の風土とこころ編集委員会…。そして尺鮎を喰う会や藤もとの会など遊びの数々。どれも充実感あふれる楽しい集いだった。

特に「熊本の風土とこころ編集委員会」－これは熊本県観光課と熊日情報文化センターの共同企画で、荒木精之さんが会長だった。今江さんは第1巻の「熊本の植物」の担当だったが、熊本記念植物採集会のメンバーと一緒にこの文庫本をまとめあげた。発行と同時にこの本は版を重ね、たちまちベストセラーになった。このシリーズは結局28巻発行され、いずれも5000部以上売れたが、その牽引車となったのが今江さん編著の「熊本の植物」であったことは間違いない。

この会では本が1冊出版されると、その反省会と称してささやかな小宴が開かれるのが常であった。荒木会長を囲むおしゃべりは実に楽しかったが、それまで全くの下戸だった今江さんが、ビール1杯、2杯が飲めるようになり、大進歩だと皆んなから冷やかされながら顔を赤く染めていたことを思い出す。

五高記念館友の会のことも触れて置きたい。平成13年3月のことだ。旧制五高の最後の入学生で、熊大1期生の今江さんをはじめ、盟友の西岡鐵夫、中島最吉さんらから呼び出しがかかり熊大に集まった。重文である五高記念館をなんとか守り活用したいという話だ。やろうという事になったが、「世代交代だ」と称して、私が代表世話人を押し付けられた。それまでほとんど見捨てられ、予算もなかった赤煉瓦の館を再生するため、友の会が果たした役割は大きかったと思う。今や記念館は熊本大学の歴史的シンボル、原点となっている。

今江さんにとって五高は青春そのものだったのだろう。五高を語る時の夢見るような眼差し、献身的な世話ぶり、直接五高とは関係ない私などにとって、母校への思い入れの強さはある意味うらやましく思った。今江、西岡、中島。あの仕掛け3人組も今やこの世にない。

今江さんはどちらかと言えば生真面目人間だった。盟友の“テッペイしゃん”こと西岡鐵夫さんは今江さんを評して「冗談の通じん男だけ下ネタなどは絶対ダメよ」とよく言われたが、私から見ると結構、済々覺的悪ごろ精神も合わせ持っていたと思う。何にでも関心があった。おしゃべりが好きで、時に饒舌なあいさつには参ったが、話は面白かった。読書家で雑学の大家でもあった。

熊大退官後、崇城大学へ移ったが、「この学生は実に素直でいい」とよくもらしていた。官学にない私学のよさ。熊大時代よりかえって伸び伸びと授業を楽しんだのではないかと思う。熊大ではなぜか名誉教授にならなかったが、むしろそれを誇りにしているようなところがあって、私は好きだった。

平成26年12月11日、訃報が届く。嗚呼！

ありがとう今江先輩。安らかに眠りください。

（熊本自然環境研究連合会顧問、元熊本日日新聞記者）



いまえ せいち  
**今江 正知**

昭和 4 (1929) 年 11 月 26 日生  
 平成 26 (2014) 年 12 月 11 日 内因性心臓死により死去

本籍地 熊本県熊本市黒髪町大字下立田 68 番地  
 現住所 熊本県熊本市東区新南部 2 丁目 5 番 12 号



阿蘇で 今江先生、妻の瑛子さん、長男誠さん（昭和35年頃 阿蘇）

## 経歴

昭和 4 年 11 月 26 日 東京府東京市麻布区谷町 18 番地で生まれる  
 昭和 11 年 4 月 東京府港区立三河台尋常小学校  
 (現港区立麻布小学校) 入学

17 年 3 月 東京府東京市立富谷国民学校  
 (現渋谷区立富谷小学校) 卒

17 年 4 月 東京府立豊多摩中学校入学

19 年 4 月 熊本県立中学校済々黌第 3 学年に編入

22 年 3 月 熊本県立中学校済々黌卒業

22 年 4 月 第五高等学校理科入学

24 年 3 月 第五高等学校第 1 学年修了

24 年 9 月 熊本大学理学部生物学科入学

28 年 3 月 熊本大学理学部生物学科卒業

28 年 4 月 熊本県立人吉高等学校教諭

30 年 3 月 熊本県立人吉高等学校退職

30 年 11 月 熊本大学理学部助手

32 年 11 月 岡村瑛子と結婚

34 年 2 月 長男誠誕生

38 年 10 月 次男望誕生

40 年 12 月 長女ゆかり誕生

45 年 10 月 熊本大学教養部講師

52 年 4 月 熊本大学教養部助教授

60 年 8 月 熊本大学教養部教授

平成 7 年 3 月 定年退官

9 年 4 月 熊本工業大学教授 (総合教育)

12 年 4 月 崇城大学教授 (総合教育) || 校名変更

15 年 3 月 崇城大学退職

## 社会活動

・熊本記念植物採集会（1958年入会、64年幹事、69年理事、95年副会長、98年会長）創立者で初代会長の上妻博之先生、第2代会長の山城學先生の後を受けて、明治時代から続く熊本県の植物の調査・研究と自然保護の推進。「熊本県植物誌」（1969年）の編纂と刊行

- ・熊本県内の自然保護活動 「菊池溪谷の保存問題」（1964年）「立田山の緑地保存問題」「九州脊梁山地の原生林保存」「江津湖の保全」「阿蘇の草地改良の問題」「水俣無田湿地の保存」など保護運動、老樹名木の調査、サクラの天狗巢病撲滅運動など
- ・熊本県自然環境研究会（会長）学習会の開催と、それをもとに「郷土の自然に親しむ」自然観察の手引き」の刊行
- ・阿蘇野草園造成調査委員会（会長）南阿蘇ビジターセンターと阿蘇野草園の造成、野草園での「はなしのぶコンサート」の実行委員長、全国植樹祭（1985年）の際の野草園への行幸にご説明
- ・熊本県文化財保護審議会 天然記念物問題
- ・大津街道杉並木保存整備検討委員会 大津杉並木の保存問題（1991年）にあたる

### 熊本県関係

・熊本県自然環境保全審議会（自然保護部会長）熊本県自然保護基本方針の作成

・熊本県自然保護読本編集委員会（会長）熊本県自然保護読本「自然保護とあなた」（1977年）の刊行

・自然環境保全地域等検討委員会 自然環境保全地域「久木野大川」「波野のスズラン」「天草染岳」「大野溪谷」の指定

・熊本県稀少動植物保護調査委員会 希少野生動植物保護など

・熊本県の風土とこころ編集委員会 荒木精之、松本雅明会長を補佐して全体のまとめ、「熊本の植物」「熊本の山」編集担当

- ・熊本県緑化推進委員会
- ・熊本県の緑化樹木編集委員会（会長）「熊本の緑化樹木」（1993年）の編集など
- ・熊本県環境影響評価審査会（会長）
- ・熊本県環境美化審議会
- ・熊本県自然保護施策推進検討会
- ・熊本県環境センタ―環境教育指導者
- ・熊本県水資源総合計画検討委員会
- ・熊本県観光審議会委員
- ・国際花と緑の博覧会出展計画検討会
- ・大規模児童遊園検討準備会
- ・熊本県環境配慮専門委員
- ・熊本県緑地保全制度検討委員会
- ・九州中央山地国定公園熊本地域管理計画検討会（会長）

阿蘇で 今江先生、誠さん、長女ゆかりさん（昭和41年5月）



### 熊本市関係

・熊本市自然保護審議会（会長）緑地保全問題など

・熊本市環境審議会

・熊本市学校環境緑化コンクール審査委員会（会長）

・熊本市学校緑化読本編集委員会（会長）「学校緑化のすすめ」（1981年）を刊行するなど、熊本市の学校緑化を全国トップクラスに導いた。平成11年度には高平台小が全国の最優秀校に選ばれた

（次ページへ続く）



結婚式 今江先生、瑛子さん、仲人の野口彰先生の奥様（昭和32年11月、熊本大神宮で）



還暦祝いで 今江先生、瑛子さん（平成 11 年 11 月）

（社会活動の続き）

- ・ 森の都推進委員会 花畑公園のクスノキの蘇生問題（1974年）など
  - ・ 熊本城整備研究会 「熊本城整備に関する報告書」（1974年）で緑地と観光問題を担当
  - ・ 熊本市自然・文化資料集成委員会
- ― 菊池市 ―
- ・ 竜門ダム地域整備協議会

- ― 姫戸町 ―
- ・ 白嶽湿地の保全と整備検討委

- ― 五木村 ―
- ・ 五木村景観審議会（会長）

- ― 環境庁関係 ―
- ・ 自然環境保全基礎調査（種の多様性調査）熊本県委員
- ・ 阿蘇くじゅう国立公園阿蘇地域の管理計画検討会

- ・ 雲仙天草国立公園天草地域の管理計画検討会
- ・ 阿蘇地域の保護指定植物の検討
- ・ 天草地域の保護指定植物の検討
- ・ 南阿蘇ヒーターセンター計画検討委員会
- ・ ハナシノブ保護増殖連絡協議会
- ・ ハナシノブ保護増殖検討委員会

- ― 建設省関係 ―
- ・ 河川水辺の国勢調査アドバイザー
- ・ 菊池川「うるおいのある川づくり」検討委員会
- ・ 加勢川ふるさとの川整備計画検討会
- ・ 立野ダム環境保全・創造に関する検討委員会
- ・ 川辺川環境保全・創造に関する検討委員会

- ― その他 ―
- ・ 熊本文化懇話会（環境文化部門世話人）
- ・ くまもと緑の財団運営委員会
- ・ シエーンズとハーン記念祭実行委員会
- ・ 64くまもと漱石博

- ・ 白川河川懇談会委員

- ・ 白川水系河川環境管理協議会委員

- ・ 竜門ダムモニタリング委員会

- ・ 竜門ダム地域整備協議会

- ・ 加瀬川ふるさとの川づくり検討委員会

- ・ 御船川沿川植栽検討会

- ・ 熊本 川の交流広場づくり懇談会

- ・ 子守唄の里再生整備計画検討委員会

- ・ 九州地方建設局河川技術委員会 多自然工法の環境評価・工法・管理

- ― 林野庁関係 ―

- ・ 九州森林管理局地域管理計画策定有識者懇談会

- ・ 運輸省関係

- ・ 熊本空港緩衝緑地造成検討委員会

- ― その他 ―

- ・ 熊本文化懇話会（環境文化部門世話人）
- ・ くまもと緑の財団運営委員会
- ・ シエーンズとハーン記念祭実行委員会
- ・ 64くまもと漱石博

- 100人委員会

- ・ 「日本の渚百選」熊本県地方委員会

- ・ 五高記念館開設準備委員

- ・ 第9回熊本県文化祭「森の都シンポジウム」小委員会

- ・ はなしのふコンサート実行委員長

- ・ 熊日出版文化賞選定委員

- ・ 五家荘の会（顧問）



玉名市の実家でお正月  
父美義さん、母喜久江さん、今江先生、瑛子さん、次男望さん、長女ゆかりさん（昭和 59 年 1 月）



野外実習で学生たちと

## 受賞

- |                 |                        |                        |                          |                       |                      |                      |                      |                     |                     |                   |                      |                      |                     |                   |                    |                    |
|-----------------|------------------------|------------------------|--------------------------|-----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|---------------------|---------------------|-------------------|----------------------|----------------------|---------------------|-------------------|--------------------|--------------------|
| 24年             | 22年                    | 15年                    | 14年                      | 14年                   | 13年                  | 11年                  | 10年                  | 8年                  | 8年                  | 7年                | 6年                   | 平成5年                 | 55年                 | 48年               | 46年                | 昭和45年              |
| 熊本大学卒業生表彰(熊本大学) | 第38回熊本県芸術功労者(熊本県文化懇話会) | 「みどりの日」自然環境功労者(ふれあい部門) | 第3回明日への環境賞「農業特別賞」(朝日新聞社) | 第22回荒木精之文化賞(熊本県文化懇話会) | 第23回熊日出版文化賞(熊本日日新聞社) | 第21回熊日出版文化賞(熊本日日新聞社) | 第20回熊日出版文化賞(熊本日日新聞社) | 第19回信友社賞(公益財団法人信友社) | 環境庁地域環境保全功労者表彰(環境庁) | 熊本大学永年勤続者表彰(熊本大学) | 第15回熊日出版文化賞(熊本日日新聞社) | 第14回熊日出版文化賞(熊本日日新聞社) | 第3回熊日出版文化賞(熊本日日新聞社) | 熊本大学永年勤続者表彰(熊本大学) | 第30回西日本文化賞(西日本新聞社) | 第20回熊日社会賞(熊本日日新聞社) |

# 10年早かった大学人

石田昭夫 (熊本大学名誉教授)



今江さんは大学人として10年早かった。いや20年かもしれない。今こそ大学は研究、教育、社会貢献が3本柱となっているが、今江さんが熊大にいたころはそうではなかつ

た。研究がダントツの1位で、社会貢献といったアカデミックではないものはあるまじきものという雰囲気があった。今江さんはそんなことは百も承知のうえで、学生にはもちろん一般社会でも自然保護や環境教育を熱心に行った。

私は昭和42年9月に広島大から熊大にきた。すでに43年11月に熊本で日本植物学会が開かれることが決まっております。その準備が本格化していた。当時の植物学教室は理学部、教育学部合わせて6人。事務局は実質的に今江さん1人だった。私は教員になりたてで、しかも中

学校の修学旅行以来の熊本。それでも「七人の侍の7人目が来てくれた」と、今江さんは喜んでくれた。以来、新婚の私も、その日には帰れない毎日が続いた。今江さんといえば奥さんが「いつ帰って寝たのか、朝になると横に寝ていた」といわれたほど。

前回開催地は東大で、せっかくのマニュアルもほとんど熊本では通用しない。すべてを一から2人でやらねばならなかった。その第一が資金集め。参加費だけで賄えるわけはなく、かなりの金額を集める必要があった。ちよつとでも引つかりがある個人や企業などに寄付をお願いして回った。会場はもちろん参加者の宿の確保、さまざまな印刷物の編集、学会当日のスタッフの確保と教育…次から次にやらねばならないことがあった。

同時に木造平屋の今江研究室では連日連夜、熊本記念植物採集会の熊本県植物誌の編さん作業が続いていた。上妻博之会長1周忌の43年7月に「熊本県植物誌」を出すという悲願達成に今江さんは採集会のメンバーと立ち向かっていた。植物学会と植物誌という二大事業に果敢に取り組む今江さんの姿が、以来50年の

付き合いの原点となった。

一方で大学内での今江さんの研究者としての評価は決して高くなかった。当時は論文や学会発表が主に評価の基準となっており、今江さんは論文や発表に積極的ではなかったからだ。各種の調査報告書は数えきれないほど多いし、県などの委員会で人が嫌がることもあえて指摘し、口やかましい先生で通っていたが、それは大学外のことだった。

教育には熱かった。今江さんの実習の代名詞ともなっている「パンジーのスケッチ」は生物科や医学部で伝説となっているし、阿蘇や市房山、甑島などでのハードな野外実習を懐かしむ卒業生も多い。実際、多くの人材が育ち、今、第一線で活躍している。

かつて生物科の井上寛教授が「今江君は新聞記者に向いている。博覧強記で正義感が強い」といわれたことがある。今江さんも「Walking Dictionaryですね」と言つとにこりとされていた。好き嫌いがはつきりし、正論を遠慮会釈なく物申す。人を巻き込んで目的を成就し、その過程で人を育てる才能は並大抵ではなかった。優れて教育者だった。(談)



# 昭和天皇から御賜金3万円

岩永恭三 (元県職員)

先生に初めてお会いしたのは、昭和41年です。私は昭和38年に県庁に入庁し、当時、観光課施設係で自然公園(国立、国定、県立公園)の許認可事務等、自然に関する仕事を担当していました。

ある日、「熊大の今江ですが」と県庁にお見えになりました。用件は、「今、熊本県の植物誌を編纂しているが、県内各地の地名の呼び方を正確に知りたい。併せて近々熊本で全国植物学会を開催する。その資料作りの参考としたいので出来るだけの種類の観光パンフレットを揃えてほしい」とのことでした。学会の後、「肥後の雑学」と「熊本、ぶらり食へ歩き」という小冊子を持ってお礼に来られました。(この小冊子が後に、県企画で熊本日日新聞社発行の「風土とこころ」シリーズの発想の下地になりました。)

その頃、県では九州中央山地国定公園の指定準備のため、熊本大学の動物は吉倉真教授、地形地質は今西茂教授、植物は野口彰教授にお願いしていました。が、実質的には植物は今江先生が担当しておられ、これが縁となり、先生の研究室にお伺いすることが多くなりました。

同じころ、先生から「先日、阿蘇に行つて来たが、あの荒れ方は何なの?」と問われました。当時高度経済成長が始まっていたころで、外輪山の原野は国の大規模畜産基地造成により草地改良が進み、外輪山壁では各地で採石場の開発が目立ち始めていました。当時の特別地域の拡張案を環境庁にお願いし、先生に相談しながら、公園計画を見直すことが出来ました。当時、全国に27ヶ所(現在31ヶ所)あった国立公園の先駆けとなりました。合わせて高森町に公園の利用施設として休暇村を整備することにしました。真つ先に先生を現地に案内し、構想を説明し、宿舍と野営場、そして阿蘇の自然と草原の保護保全をテーマにビジターセンターと野草園を整備、その啓発運動として「はなしのぶコンサート」を開催しました。

昭和60年5月、阿蘇で第36回全国植樹祭が開催され、昭和天皇の行幸があり、ビジターセンターと野草園にもお運びになりました。ビジターセンターに、陛下の昭和6年の行幸を記念して始まった「熊本記念植物採集会」の資料を展示し、先生が由来から活動までを説明され、陛下の

御滞在予定の1時間半が2時間になる程でした。陛下のお喜びは大変なものであったと宮内庁から漏れ聞きました。その後、宮内庁から、なんと陛下から御賜金3万円と御製「はなしのぶの歌 しみじみ聞きて生徒らの心は花の如くあれと祈る」を下さり、今まで県の歴史にも無かった栄誉を賜りました。

昭和46年、美しい熊本づくりを目標とした沢田県政が誕生しました。昭和47年には自然保護課が作られ、昭和48年には自然環境保全条例が制定され、昭和52年には自然保護のバイブルとも言われる自然保護読本「自然保護とあなた」が発刊されました。この作業こそが県職員はもとより、多くの学

識経験者がおられる中で、今江先生が中心的役割を果たされ、今江先生しか成し得なかつた最大のご功績と思っております。さらに先生

は県庁内で環境アセスメント審査会や希少野生動物植物検討委員会をはじめ多くの事業に携われられ、その殆どに「長」として御尽力されてきました。県の自然保護行政は先生あってこそ円滑に進んだと言つても過言ではありません。

そして、何より忘れてはならないことは、仕事を進められる中で多くの仲間とそして時代を担う優秀な後継者を育てられたことです。先生の足跡と御意志は、熊本県政はもとより、県民の生活の中で今後とも活かされて行くことと確信します。



# 正確さを期した熊本県植物誌

東矢力也 (熊本記念植物採集会会長)

私は熊本大学理学部甲に入学し、2年次に生物学科に入りました。2年次の植物分類学実習では、講義はコケ博士の野口彰先生に、実際の実習の指導は人吉高校から母校に帰ってこられた今江先生からで、最初の教え子の一人となりました。オドリコソウやハナウリクサ(トレニア)などが材料でした。

今江先生の実習はなんといってもパンジーが有名で、パンジーを見ると後々まで嫌な思い出がよぎる人もいるかもしれませんが、しかし、パンジーをよく観察したことで、物事の真の姿をしつかりと見つめる基礎を作ってもらったといっている人もいます。

今江先生は熊本記念植物採集会を心から愛されていました。熊本記念植物採集会は昭和6年(1931年)12月に初代会長の上妻博之先生が金峰山で第1回採集会としての勉強会をしてから80年以上になり、途中、第2次大戦やその後の混乱期などを乗り越え、会の存続、維持、発展には今江先生、中島典雄先生、浜田善利先生によるところが大きいと思います。

特に熊本県植物誌の発刊(昭和44年11969年)は地方植物誌とし

ての最高の評価を得ました。私は昭和37年(1962年)に新設の第二高校に勤務することになり、編集作業に加わりました。事務局は第一高校の生物教室から当時、勧業館の2階にあつた熊本市立熊本博物館、そして熊大の生物教室に移り、7年後に発刊に至りました。その間の上妻先生、山城先生の奥様が死去されるという不幸もありましたが、申請していた文部省の科学研究補助金が発刊を急がせることにもなり、毎日夜の作業が続きました。今江先生も精力的に頑張られました。独特の字で書かれた原稿の青コピーを今でもはつきり覚えています。やっと出来上がった印刷物を文部省に届けるため、飛行機で今江先生が持参することになり、会として最初で最後となる代金を支出しました。熊本県植物誌の大きな特色は正確さを期すことで、分からないことは分からないと記したこと。今後の調査研究のための資料となるようにということでした。

1970~1980年にかけて、全国的に自然保護運動の高まりとともに「採集は悪だ」という声が大きくなり、会の名称をどうするかということになりましたが、今江先生は「親

がつけた名前をそんなに簡単に変えることはできない。必要な採集は絶対悪ではない」という信念で対処されました。その結果、県、国、新聞社も名称にこだわることなく、会の

実績に対していろいろな賞を出したのだと思います。いろいろと思いをこめてみましたが、今江先生の信念の強さには今さらながら感服する次第です。



平成17年9月 矢山岳例会で

# 自然の側に立った多様な活動

永田 瑞穂 (熊本自然環境研究連合会会長)



熊本自然環境研究連合会の五家荘自然塾で

的として

熊本自然環境研究会

会結成の1994年～

2013年 会長 「自

然環境研究学習会」多

様な自然の実相を明ら

かにし自然観察の指導

者を養成する。県立大

学を借りて、各月第3

土曜日午後4時間の講

義と3日間の野外実習

(年間計72時間の講座)

第一期(1995.9.6-97

年度)、二期(2000.01

・02年度)、三期(2003

・04.05年度)実施延

べ450名が受講

『郷土の自然に親し

む』(今江正知監修)郷

土の自然環境を身近に

学習するための書

熊本自然環境研究会

出版(1999年「熊

日出版文化賞」を受賞)

「里山シンポジウム」のコー

ディネーター(熊本県との共催・

1999年8月20日グランメッセ熊

本で実施)

里山研究会 会結成の2002年～

2013年 会長 多様な自然と息長

く関わり合い、自然との共生のあり

方を探っていくこととする会

熊本自然環境研究連合会 会結成

の2006年～2013年 会長 以

後会の顧問

自然とよりよい人間生活のありよ

うを探るといふ類似主旨で活動して

きた五家荘の会、宇城自然観察会、

熊本自然環境研究会、熊本里山研究

会4会の連合会

自然環境および自然と人の関わり

について現地調査例会、年10回以上

実施

『五家荘 森の文化』(「五家荘の会」

創立30周年記念刊行)

2011年9月5日 熊本自然環

境研究連合会(会長 今江正知)発行

多様な自然と関わり続けて大学教

育にも長く携わっておられた先生の

指導法は、マニュアル通りの早わかり

な結論を回避し、新たな課題を与え、

ゴールをより先の方に置いて考えさ

せ、自分で気づくようにし向けると

いう手法が見られた。問題を持って

問いかけを続ける人には、独り立ち

できるまで後押しをする面倒見のよ

さを見受けることも多かった。

(別れを悼み、回想して捧ぐ)

人は、日々健全な自然環境の中で

暮らすことを有り難く感じて生きて

いる。今江先生は、自然の中でつま

く生きるとはどういうことかを考え

続けた方でいらした。複雑で有

機的な自然の側に立つために、多様

な活動を展開し多方面に尽力し続け

ておられた。先生との別れを悼んで、

多岐にわたる活動の一端を挙げる。

宇城自然観察会 1987年～2000

6年 会顧問 自然観察会の実施を目

# 自然保護活動で人材育成

高添 清 (熊本野生生物研究会会長)

熊本野生生物研究会は今江先生に顧問をお願いし、前会長西岡鐵夫先生とともに、本当に長く本会の発展のためにご指導いただき心から感謝しています。

鋭い洞察力と先見性をお持ちで、問題の核心を見つけ、その視点から生じている課題・問題を考察し対策に取り組まれる方でした。そこからは、人材育成のために教育分野で今何が必要であるかを常に考えられそれに取り組んでおられた姿の原点が伺えます。このことは将来を担う児童生徒学生に関わる者として最も重要なことではないかと思えます。つまり、未来のためになされる計画を立案実行される方でした。愛情あふれる指導法は容赦のないものでしたが、その基盤は公平・公正で愛情にあふれ、学生や後輩の成長を常に喜ばれる方でした。

多様化し混沌とした現代社会の中にあつて先生の指導法は「教育者はいかにあるべきか」を示されたものでもあると振り返ることが出来ます。その代表が「自然保護とあなた」ではないかと思えます。これは先生の目指しているものが凝縮された貴重なものです。同時に発行に向け、多

くの教え子を内容検討する編集委員として参加させ、人材育成を心がけておられます。そのマネージメントは私たちの模範ともなるものです。舞台上に演出者の姿がないこととダブリます。ご自身が突出するのではなく、多くの熊本の文化・経済界等広い分野の指導的な方々の賛同を得ながら、熱心に自然保護を訴えられた業績はこれからも人々の心に光り輝くものだと思えます。

5年ほど前、熊本大学が発行する印刷物の中に「熊大生よバカになれ」という見出しで先生が寄稿されていました。興味関心のあることに夢中になつて取り組むことを勧められ、そこから自らの力で、自立していくことを勧められていました。「熊本城の植物」という本の「序」では「知るは喜びなり、そして知るは愛の始まりなり」は今江先生が書かれた言葉ですが、本当にその通りだと思えます。しかもその文脈には教育分野も含めて、指導者のあるべき姿がにじみ出たものとなっています。

昭和40年代「熊本県植物誌」発行の際、ともに、熊大の腊葉室のナフタリンにまみれながら「バカ」になつて取り組んだあの日々の出来事は決

して忘れることはありません。晩年には、「はなしのぶコンサート」(植物と人を対等に見て自然保護思想を定着されたこの取り組みは素晴らしいものでした)案内チラシが大量に入ったリュックを肩に、県庁の階段を杖を片手に上り、関係する部署や様々な方に配布されていました。そのお姿から偲ばれる先生の思想や地域への愛情のかけ方は、私たちの重要な精神的支柱であり、熊本野生生物研究会の「目的」に掲げた、「調査研究の充実・発展とそれを教育分野に還元する」に生かされています。これからも今江先生は永久に本会の顧問です。西岡先生と天国で語りながらお過ごしだと願いながら、心から感謝し、ご冥福をお祈りします。



熊本野生研の大津町本田技研周辺総合調査で

# 野の花に捧げる“はなしのぶコンサート”

内野明徳（熊本大学名誉教授）



平成21年6月 はなしのぶコンサート

「はなしのぶコンサート」の発端は1981年に高森町の原野で開かれた阿蘇特産のハナシノブに捧げる演奏会です。この演奏会は「人と野の花の交流」として報道されました。ところが直後に、その原野のハナシ

ノブは盗掘されて壊滅状態になりました。

その頃、今江正知・西岡鐵夫の両先生と私たちは、阿蘇の自然を紹介する南阿蘇ビジターセンターの展示と阿蘇の生態系と生物多様性を紹介する野草園を造成中

です。その関係者一同で相談の上、「野の花に捧げるコンサート」として演奏会を野草園で引き継ぎ、あわせて自然観察会を行うことになりました。人と野の花は生態系の中でそれぞれ役割を果たしている、私たちが健全に生きていくためには野の花は欠かせない存在です。そのために、野の花に感謝をこめて音楽を捧げようという考えです。こうして、林田戦太郎指揮・尚綱高校のマンドリン演奏による「第2回はなしのぶコンサート」を阿蘇野草園で実施しました（1982年6月27日）。

爾来33年間、多くの方々のご支援・協力で継続できました。

第36回全国植樹祭（1985年）の折には、昭和天皇が野草園をご訪問にられました。ご説明役の今江先生は緊張した面持ちで、背筋から手の先までピンと伸ばした姿勢で、日頃からは信じられない丁寧な言葉づかいをされていました。特別奉迎者として参列していた私たちは、「さすが昭和一桁生まれの人だなあ」と囁きあつたものでした。その折「組曲はなしのぶ」のマンドリン演奏でお迎えし、天皇は大層お喜びになられました。その時の気持ちを演奏した尚綱高校に示された歌が、「はなしのぶの花の如くあれと祈る」です。今江先生はこれをお歌を特に大切にされていました。

ハナシノブが咲く頃は梅雨の時期です。15回目頃までは晴・曇天日が多かったのが、回を重ねるごとに雨天日が多くなってきました。今江・西岡両先生は名にし負う雨男でしたが、その自覚がないお二人は私を巻き込んで責任のなすりあいを続けていました。そして、ついに最近の10年程はほとんどが雨にたたられるこ

とになってしまいました。

このようにして、今江先生を中心として林田さん・県庁の岩永さん・休暇村の後藤さんたちを含めて、ふざけあつたり、切磋琢磨したり、悩んだりしながら「はなしのぶコンサート」を運営してきました。そして、野の花の美しさと大切さを多くの方々に伝えることができたと思っております。2003年には、コンサート実行委員会は自然環境功労者として環境大臣表彰を受けることもできました。今江先生が実行委員長を退かれた最後の数年間は、副委員長だった私が委員長を引き継ぎました。しかし、諸般の事情で、第34回でコンサートの幕を降ろしました（2014年6月22日）。

今江先生は、南阿蘇休暇村の開設・ビジターセンターの展示・阿蘇野草園の設置・はなしのぶコンサートの開催など、長期間にわたって私たちの指導的立場を果たしてこられました。また、私は50余年にわたって、恩師・先輩・上司として筆舌に尽くしがたい程お世話をいただきました。有難うございました。

# 「映画文化史」で教育的指導

辻 昭二郎 (熊本大学非常勤講師)

1988年から今迄27年間も続けている熊本大学の「映画文化史」の創設者は今江先生であった。その1年前に「五百年映画祭」の催しがあり、その企画者は私の熊大英文同期の中島最吉教授(通称モキツア)であり、在学中に映画部を立ち上げた事もあって、私は協力を求められた。

中島さんと私は共に熊大の1期生(昭和24年開学)である。その時、五高にはまだ2学年が残っていたが、1年生は熊大1期生として吸収された。そしてその新制大学は駅弁を売っているような町に大学ができたという事で「駅弁大学」と揶揄された。

しかし、旧制高校の中の、学校名に番号がついていた誇り高いナンバースクール出身者である旧五高生達の結束は固く、学部こそ違え、文の中島の今江両先生の、死に至る迄のつながりはここにあったようだ。

「映画文化史」の講義が始まる前、まだ現役だった私の映画館(東宝プラザ)の事務所に熊大教養部の先生が尋ねてきたが、それが今江先生であった。あとで分かったことだが、既に講師に決まっていた藤川治水さんが私を推薦したので様子を見に来ら

れたようであった。今江先生は御礼奉公初任地の人吉高校時代に行った映画館の事務所の雰囲気か気に入ったので延長線上の私の事務所への来訪だったようで、これが私の講師決定のポイントとなったようだ。

今江先生は理系なのに何故映画なのかという事だが、研究室には600本のベータの映画コピーが並んでいた。熊大の初めの頃の休憩時間の話題は95%が新作映画の事だったそうだ。戦争に負けて、もう一生外国へ行く事も無かるう、それならばせめて欧米映画を見て、その中にある憧れの地の空気を四角な画面から、みんなが吸収しようとしていたのだ。

「映画文化史」は当時、全国の国立大学の中では唯一の映画講座だったようだ。講師は、学内からは今江先生のほかにドイツ語の田中雄次、英語の長谷川清二(熊大1期生)の御両名。学外からは先に挙げた藤川さんと私、SF作家の梶尾真治さんの3名だった。

生まれて初めての大学の授業。私は、今日はこれだけ話そうと10項目を用意したが、話せたのは3つ位。それを生徒席から今江先生がじつと見ている、研究室へ帰ると「あなたの

話のここはこう悪かった、ここはこ

う話さねば」と30分くらい

教育的指導があつた。あと

で聞いたのだが、今江先

生は私の濟々覺の後輩だつ

た。

この、お互いの講義の見

学はほかの先生方もそうであつて、この様子を見て、中島さんは「督戦隊のごた

る」と言っていた。講義は木曜の5時限目で終わると、研究室での督戦

隊員の酒盛りが時には午前2時迄続いた。奈良漬に刺した爪楊枝をなめても真つ赤になる今江先生に対しての私のお酒教育によって、2年後に



「映画文化史」講座のメンバーと

は今江先生もビールをジョッキ2杯迄呑めるように成長された。

今、その頃を振り返ると、なんと豊穡だった熊本大学の日々だったとしみじみ思う。

# 漱石のようにポンとポケットマネー

中川良子、吉村隆之（くまもと漱石倶楽部）

くまもと漱石倶楽部の発足は2001年4月です。同年2月の準備会で、満場一致で今江先生を会長に選任しました。当初「自分は文学は専門外だから」と固辞されましたが、「この会は漱石の文学、足跡などを楽しむのが目的だから、会長は漱石研究者ではないほうが敷居が高くなってよい」という準備会の総意で会長に就任されました。当時、先生は

崇城大学にお勤めでしたので事務局をご自分の研究室にされましたが、熊本中央区内坪井町の漱石第五旧居のほうで連絡をとりやすいということで、当時の所管である熊本市文化財課と交渉し、旧居が事務局となりました。

第1回総会は旧居で開催しました。会員募集は熊本アイルランド協会など熊本に呼びかけ、特に今江先生は最後の五高生ということで五高関係者の方々の協力や加入が多数ありました。その前年、漱石第五旧居と松山坊つちゃん会、東京の鎌倉漱石の會と情報交換をしていましたので、松山、鎌倉、東京方面からの会員も増え、1年目は300名近い会員数となりました。例会は年4、5回行いましたが、特に阿蘇、小天

への文学散歩では講師の話と今江先生御専門の植物の話と両方聞く事ができ、文学と植物を結びつけたユニークな例会で参加者は大満足でした。小説「二百十日」の舞台、阿蘇への文学散歩の時ハルリンドウが咲いており、これはその色から『星のしずく』とも言つと教わり、漱石の俳句に「星のしずくの文言がなかったかな」などと想像したものです。

くまもと漱石倶楽部の活動が軌道に乗ると、先生は対外的な役目、例えば漱石倶楽部主催の事業について行政、大学、企業などに協力、支援を求めることに力を注がれました。年何せ、年会費は1000円です。年1回の会報制作費に収入の半分ほどが消えていく状況でした。会員が講師となった講演会、熊本市内の文学散歩、漱石忌を兼題とした定例会など、ほぼ経費ゼロの活動ですが、少し外に向けたイベントをするとなると大変です。

2006年の「草枕」二百十日一発表から百年を記念した事業も漱石倶楽部の身の丈に合わない大がかりな企画でした。ただ、不思議なもので、今江先生をはじめ、中村青史先生たちを通して多くの皆様のサポートも



くまもと漱石倶楽部の講演会で

あつて、半年間で関連イベントを含め50近い催しになりました。その4年後、くまもと漱石倶楽部創立十周年の記念展を開催しました。

熊本市交通センターで漱石倶楽部の歩みをたどるパネル展をはじめ、漱石にちなんだ商品の販売会、書店でのクイズ大会など「お祭り色」の強い催しでした。ただ、この時は収支の見通しが甘く赤字。頼りない事務局が困っていたところ、今江先生がポンとポケットマネーを差し出され補てんされました。五高のポर्ट部

部長だった漱石が、学生が使い込んだ飲食代を気前よく支払った事件が思い出されます。

漱石の生誕150年、来熊120年、没後100年を記念する全国規模のイベントが来年と再来年に予定されています。そのオープニングを熊本で開くことが決まりましたが、こうした漱石顕彰活動の礎が築かれたのは、漱石倶楽部の先頭を走ってこられた今江先生のご功績と云つても過言ではないでしょう。

# 同生会の生き字引き的存在

吉玉国二郎 (同生会元会長)

今江先生の熊本大学での足跡を振り返るとき、大学の前身である第五高等学校、熊本大学理学部及び理学部生物学科(現、生物学コース)等の同窓会活動めきには語る事が出来ない。本稿では、特に理学部生物学科同窓会(通称、同生会と呼ぶ)と先生との関わりについて述べたい。

先生は、終戦後の学制改革で本学が第五高等学校から熊本大学へと改組された際に設置された理学部生物学科の第1期生で、同生会の設立当初から参加され、長年に渡り本会の会長を務めて来られた。会は今年の3月時点で設立60周年を迎え、会員はすでに千人を越えている。先生は関係された同窓会の中でも、特に本会に対しては愛着が深く、さまざまな関連行事を行うに際して、常にその先頭に立って運営に携わってこられた。また、同生会の会議や懇親会にも、ほぼ毎回顔を出し、ご挨拶や乾杯の音頭などをなさっていた。

昨年(平成26年)開催された生物学科設置65周年記念大同生会にも参加され、閉会前に撮影した集合写真では前列中央でこやかに微笑んでいらつしやる先生の姿が見られる。まさか、これが先生の同生会における

最後の写真になるとは予想だにできなかった。この頃は、少し足がこ不自由だったが、まだまだ元気で、多くの卒業生達とこやかに談笑されていた。そのコマは、最近会員へ送付した「同生会ニュース」に掲載されている。

同生会では、今から16年前に設立50周年記念誌を発刊したが、出版に際して設立当初の木造校舎の写真や、以前生物教室に所属されていた先生の写真など、多くの思い出に残る記録を精力的に収集されていた。本誌は生物学教室の歴史を語る上での貴重な一冊になっている。同生会では、発会当初から43年間にわたり、学科の3年生が中心になり、毎年「同生会誌」という小冊子を作成していたが、その発刊に際しても、編集に携わる学生は先生から編集に際しての多くのアドバイスを受けていた。

先生は、教育および研究の面でも非常に精力的で、今では熊本県の植生調査のバイブルとまで言われている「熊本県植物誌」編集の折には、連日深夜まで原稿の取りまとめに一人で取り組まれていた。また、先生の教育に対する真摯な姿は今でもその講義・実習を受講した卒業生の間で語り草になっている。教養部での

実習に際して、深夜に亘るまで、熱心に指導を受けた医学部卒業生のほとんどは先生のことを「パンジーの今江先生」として記憶に留めている。先生は、理学部同窓会の会長も長年務め、会の継続と発展に大いに尽力なさった。

先生がまだ理学部で助手のころ、先生はバイクや車が好きで、毎日どこかを修理しながら運転されていた。小生は、寮からの通学用として、先生が整備された原付バイクをいただいた。数年通ったものだ。また、先生の車で大分の山地へ材料採集に出かけたのだが、坂道で車がしばしばエンストをし、先生はその度にボンネットを開けて

修理されていたことを思い出す。同生会の生き字引き的存在であった先生の逝去は残念だが、生物学科及び同生会の発展に大きく寄与された先生に心から感謝したい。



平成26年の生物学科設置65周年記念大同生会で



# 思い出深い臨海実験所の研修

内布洋一（人吉高校第8期生）

昭和28年春、今江先生は熊本大学を卒業するとすぐに、人吉高校へ赴任された。8期生として先生と同時に入学式を迎えた私は、3年間、先生のクラスになることはなかったが、先生から最も多くのことを学び、影響を受けた一人であった。

私は迷わず生物部に入学したが、上級生はおらず、今江先生が顧問となり、新しい生物部が発足した。活動は主として実験室であったが、教員室にも5、6人は座る場所があったので、自由に入出し、先生たちともよく雑談をし、居心地のいいところだった。最初の活動は花の栽培だった。生物教室の窓側は中庭で、2棟の温室があり、また、校舎の軒下に沿ってレンガ囲いの花壇があった。しかし、いずれの場所も放置されていたため、花の姿はほとんど見かけられなかった。そこで、それら全てを生物部で管理をし、美化しようとして先生が計画され、活動を始めた。2、3ヶ月後には中庭全体が花盛りとなり、多くの人から喜ばれた。

生物部は、野外活動にも行った。近郊の野山や川辺を辿りながら、小動物や植物の観察である。野冊と胴乱、バケツなどを持参し、弁当を持つ

て遠足気分であった。捕獲した赤腹イモリを持ち帰り、発生の実習に用いたこともあった。1回だけの試みではあったが、人吉温泉の衛生調査を行ったこともあった。市内数力所の公衆温泉の湯を採取して、大腸菌の数を数えるもので、検査は先生が行い、検査材料の採取に私どもは市内を駆け回った。

教務や部活動指導の合間に先生はご自身の研究活動で球磨地方の植物、特に下等植物の調査などをされていた。その為に休日には何度か山間に出かけられたが、その折に部員にも声を掛けられ同伴したこともある。また、熊大の生物教室から井上先生をはじめ2、3の先生が訪ねて来られ、一緒に山歩きしたこともあった。生物部は比較的活発に活動したこともあり、その後4、5人の新入生が入部し、私が3年生の時には、部員も十数人に増えた。最も印象深い記憶は3年時の8月18日、22日に、松島町前島にある熊大の臨海実験所へ生物部全員で出かけた研修旅行であった。実験所は貸切状態で、小山所長には、到着から出所まで、いろいろと配慮していただき、事あるごとに興味ある話をしていただいた。また、

小山所長の奥さんが私どもの食事の世話のため、わざわざ熊本市内から来られ、大変お世話になった。実験所には2艘の船があり、島々を大勢で回るときには中型のエンジン船（マジツタ丸）で、小型の艦船（オーレリア丸）は私ども生徒が自由に操船するのを許可していただいた。実験所では多様な海産物を採取したり、プランクトンを観察したり、ウニの発生過程を観察するなど、中身の濃い研修旅行であった。

また、この研修旅行は、人吉高校生物部にとって今江先生の最後の置き土産ともなった。その頃から、校内では今江先生が母校に戻られる話が出始め、私どもの卒業を待たず、突然高校を去られた。恩顧を受けた部員一同は別れに際しての細やかな贈り物に、先生自身が選ばれたモーツァルトの「魔笛」のLP盤をお渡しした。

今江先生は8期生より一

足早く人吉高校を離れられたが、8期生と同時に高校に来られ、その後の3年間を校舎の内外を問わず、共にしていただいた私どもにとっては、特別な恩師であった。



人吉高校第8期生の皆と

# 「人生は巡りあわせだな」

緒方 誠一郎 (第五高等学校同級生)

今江さんと私は中学済々躰、第五高等学校を通じ同級生である。ただ、在学中は彼が昭和19年に中学3年の時東京から転入してきた人で、クラスが違い、また私が昭和20年4月から海軍兵学校予科に入学したこともあり、お互いに面識は全くなかった。

昭和20年8月15日、敗戦により私は復員して済々躰4年に復学。彼も健軍の飛行機製作工場動員から解放されて勉学に復帰。済々躰は寄宿舎、剣道柔道場は焼けてしまったが、本館、教室は焼け残っていた。

ここで彼の生い立ちを述べておこう。彼が直接語ることはなかったが、奥さんに聞いたことを了解を得て簡単に記しておきたい。彼は昭和4年、父小佐井美義さんと母きくえさんの長男として東京で生まれ育った。美義さんは熊本県植木出身。早稲田大学卒業後、銀行マンだったそうである。きくえさんは福島県二本松出身。偶然の出会いがあったのであるうか。彼が長男でありながら母方の今江の姓を継いだのは結婚するにつき、そんな約束があったのである。昭和19年、戦局はいよいよ悪化、サイパン島が陥落して本土、特に東京が危ないということで、彼はお母

さんと共に植木に疎開してきた。そして済々躰に入り、自転車通学していたらしい。

我々の世代は戦中、戦後の学制改革の波に一番翻弄されたクラスである。まず小学校は国民学校になり、昭和20年には中学校は5年制が4年に短縮され、それが昭和21年まで延長された。このため我々のクラスは21年に4年で卒業した人と、22年に5年で卒業した人の2種類がいる。そこですんなり高等学校、専門学校に入学できた人は良かったが、昭和23年に旧制高校に入学した人は1年で修了し、新制大学をまた受験しなければならなくなった。今江さんは22年に五高理科に入学、私は1年浪人して23年に文科に入った。私は五高を1年で追い出されたクラスだが、あとで聞くと今江さんも学制改革の嵐にかなり翻弄された口だったようだ。

学生時代にはお互いを知ることにはなかったが、付き合いが始まったのは昭和59年、私が31年間務めた会社を定年退職して、父の経営する会社を引き継ぐために熊本に帰ってきてからである。郷里に戻ってきたとはいうものの30数年のブランクはいかんともしがたく、まず小学校から大学までの各同窓



五高の会 (平成22年7月)



五高開校 120 周年記念植樹式 (平成 20 年 11 月)

会にできるだけ出席するようにした。五高の同窓会に出た時である。昭和 62 年に五高創立 100 周年記念大会を開催することが決まっていた。その準備が始まっていた。今江さんをはじめ、五高出身の中島、山口の 3 人の熊大教授が中心となり、企画、立案、熊大と実行委員会との打ち合わせなどを行っていた。車の運転ができ、比較的時間の自由がきく私も応援しようということになった。

昭和 60 年、昭和天皇が植樹祭で熊本に行幸になり、高森町の野草園を視察され、今江さんが案内役となったことはご存じの通りである。その時の写真が新聞に大きく掲載され、今江さんが天皇陛下より大きく写っていると冷やかされていたのを思い出す。あとから彼が述懐したところによれば、侍従から陛下は植物に大変興味をお持ちで詳しいから、質問があつてもし曖昧なことがあつたら、調べてあとからご報告しますと答えた方が良いとアドバイスされたそうである。そんなことがなくて良かったと云っていた。

昭和 62 年 10 月 10 日、五高創立 100 周年記念同窓会は無事終了。彼はその後、同窓会会長の河原畑先生を補佐して、同窓会の世話をしてくれた。平成 19 年に創立 120 周年を行った後、高齢化のため全国規模の同窓会はなくなり、熊本では 5 にこだわって毎月 5 の日に市内のホテルで 10 名前後が集まり、おしゃべりする会だけが残っている。

今江さんは 3 年ほど前に、前立腺の手術をしてから急に歩行困難になり、この会にも 1 年以上欠席であった。昨年 12 月 5 日に久しぶりに行か

ないかと電話したが、皆さんに迷惑をかけるからと欠席。その 6 日後の 11 日に突然の訃報があつたわけである。あの電話が今江さんの声を聞いた最後になつてしまった。お互いに平均寿命をだいぶん越えており、何が起ころともおかしくない年になつているとはいえ痛恨の極みであつた。

今になつて思い出はいろいろ尽きないが、なかでも大学の研究室に彼を訪ねると、「豆をがりがりひいてコーヒーをご馳走してくれたことは忘れられない。自然環境問題が国全体の最重要課題となつてから、今江さんはその方面の第一人者として数々の受賞、表彰を受けたことは周知のことであるが、その庶民的風貌と笑顔はいつも変わらず、皆に親しまれていた。頼まれると嫌といえない人で、色々な会合、グループの会長や役員を引き受けて超多忙な人になつてしたが、人の喜びを喜びとする人生を貫かれたことは敬服のほかはない。

いつであつたか、彼がぼそぼそと「大学の理学部で人があまりやらない、一番地味な植物の研究を選んだのに、こんなに忙しくなつてしまった。人生は巡りあわせだな」と云っていたのが印象的である。



岡山寮歌祭で



(左) 平成 17 年 5 月 南阿蘇ビジターセンター (右上) 平成 7 年 3 月 退職記念講演 (右下) 文化懇話会で熊本城のイチョウについて説明

## あとがき

この追悼集は平成27年4月18日に熊本市水前寺1丁目の水前寺共済会館で開いた「故・今江正知先生を偲ぶ会」で、出席された方に配布したものです。今江先生の業績や関係された各団体、個人の方に思い出などを書いてもらいました。

いうまでもなく寄稿いただいた文章から、先生が残された大きな業績や、多くの人から慕われた人となりを知ることができます。あらためて先生の偉大さを見ると同時に、急逝が惜しまれてなりません。(編集・矢加部和幸)

## 追悼 今江正知 先生

平成27年4月18日 発行

発行：「故・今江正知先生を偲ぶ会」呼びかけ人

印刷：かもめ印刷

デザイン：佐藤デザイン研究所